

20年の集大成を 名指揮者とともに



トレヴァー・ピノック バッハ「口短調ミサ」

紀尾井ホール20年の歴史——それは紀尾井シンフォニエッタ東京の歴史でもあります。当団では、創立以来これまでの活動の集大成として、今年7月に節目となる100回目の定期演奏会を迎え、続いて創立20周年記念特別演奏会を開催します。

第100回定期演奏会の指揮には、いよいよ世界的マエストロ、セミヨーン・ビショコフが登場します。幕開けは、明るく軽快な期待感に満ちたおなじみの名曲、モーツアルトの歌劇「フィガロの結婚」序曲です。オペラにも造詣の深いビショコフの手腕に期待が高まります。

ブラームスのヴァイオリンとチェロのための二重協奏曲は、第11回定期演奏会以来の演奏です。当団とゆかりの深いヴァイオリンのライナー・ホーネックと、ホーネックの指名で、バイエルン放送響の首席チエリストからソリストに転身、ヨーロッパで大活躍の若きチエリスト、マキシミリアン・ホルヌングをソリストに迎えます。ブラームスが4つの交響曲の後継として構想し、協奏曲として完成された

この作品は、骨太で重厚な構成に加え、ソロには高度な演技が必要とされます。ヴァイオリンとチェロ、そしてオーケストラが三位一体となって奏でる豊潤な響きをお楽しみください。

この作品は、骨太で重厚な構成に加え、ソロには高度な演技が必要とされます。ヴァイオリンとチェロ、そしてオーケストラが三位一体となって奏でる豊潤な響きをお楽しみください。

この作品は、骨太で重厚な構成に加え、ソロには高度な演技が必要とされます。ヴァイオリンとチェロ、そしてオーケストラが三位一体となって奏でる豊潤な響きをお楽しみください。

祝祭的な気分に満ちた曲であり、当団でも機会あるごとに演奏してきました。室内楽の繊細さと交響楽の大胆さを併せ持つビショコフの指揮が際立つ演奏となるでしょう。

そして、メインはベートーヴェンの交響曲第7番です。也、テノールに中嶋克彦、バスに加美徹ら若手実力派のソリストを迎へ、国内外のバッハ演奏で活躍するトップクラスターの声楽家により特別編成された紀尾井バッハコーラの秀麗な演奏にも期待が高まります。

そして指揮は当団と数々の名演を繰り広げているトレバーー・ピノックです。バッハ演奏のスペシャリストとして、数々の名録音を残しているマエストロですが、宗教作品のCD録音はありません。今回の『口短調ミサ』はこうした意味でも貴重な機会で、必聴の公演といえます。

第100回定期演奏会に続く、特別演奏会は「ピノックのバッハ『口短調ミサ』」。大バッハの数ある作品の中で、マタイ受難曲、ヨハネ受難曲と並ぶ傑作にして大作の